

氏 名	伊達 舞
学 位 の 種 類	博士（文学）
学位記の番号	甲第222号
学位授与年月日	2020（令和2）年3月20日
学位授与の要件	日本女子大学学位規程第5条第1項該当
学位論文題目	中世王朝物語の研究—〈母と子〉の視座から
論文審査委員	主査 石井 倫子 （日本文学専攻 教授） 副査 高野 晴代 （日本文学専攻 教授） 福田 安典 （日本文学専攻 教授） 藤井 雅子 （史学専攻 准教授） 松岡 智之 （お茶の水女子大学 准教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

平安時代院政期から室町時代南北朝期にかけて成立した王朝物語——いわゆる中世王朝物語は、かつて『源氏物語』の群小垂流作品に過ぎないとの低評価のもと、積極的に研究対象とされることは稀であった。今日その評価は見直されつつあるものの、研究は未だ緒についたばかりである。こうした状況を踏まえ、本論文では『とりかへばや』（12世紀後期）『我が身にたどる姫君』（13世紀中後期）『木幡の時雨』（14世紀前期）の三作品を取り上げ、主に〈母と子〉の視座から考察を加える。

中世王朝物語を論じる上で看過できない問題として、〈家〉の物語としての特徴が挙げられる。王朝物語研究において〈家〉とは、「広がり意識」である〈氏〉に対し、「家系意識と家格意識とを伴う」ものとして（藤井貞和編『別冊国文学 王朝物語必携』學燈社、1987年、「家の遺志」項）、社会的地位・財産・特権・技能などの世代間継承が認められる一族筋を示す。平安時代に成立した王朝物語も〈家〉の概念と無縁ではなかったが、12世紀を始発点に、王朝物語の享受層である貴族たちの〈家〉のありようは大きく変貌を遂げた。社会的地位・財産・特権の父子継承を原理とする、いわゆる「中世的な「家」」（高橋秀樹『日本中世の家と親族』吉川弘文館、1996年）の成立である。この社会構造の変化が王朝物語にいかなる影響を及ぼしたのかという問題が先行研究における大きな焦点の一つであり、その取り組みの成果として、物語への父系論理の流入や、〈家〉の存続・繁栄の要素の重要化が明らかにされている一方、母系や母子関係は、主題を担い得ない、補助的存在と見做される傾向にある。だが、『うつほ物語』『源氏物語』などの先行物語にはさまざまな形で〈母と子〉の問題が内包され、しばしば物語の原動力ともなってきた。これらの作品の延長線上に位置する中世王朝物語においても、たとえば〈父〉の存在を意図的に希薄化し〈母と子〉の関係を強調したと考えられる作品が存在するなど、この問題に無縁であるとは考え難い。無論、物語への父系論理の流入が認められる以上、〈母と子〉

のありようや、そこに内在する問題は変容していることが推測されるが、このことを念頭に置きつつ、まずは摂関家繁栄の枠組を持つ先述の三作品を対象に、〈母と子〉がいかに描出され、どのような部分を担っているかという観点から考察することで各作品の捉え直しを行い、理解の深化を目指す。また、成立年代の異なる作品を取り上げ通史的な考察を加えることで、中世王朝物語における〈母と子〉の位置づけを明らかにする上での端緒とする。

本論文は三部構成をとる。

第Ⅰ部『とりかへばや』考―〈家〉の萌芽と〈母と息子〉は、左大臣家の繁栄を語る物語としての枠組みから本作を捉え直し、そのなかで描かれる母子の様相を、父子間・男女間の問題を交えて論じたものである。

第一章「〈家〉の繁栄と親子の離別」では、物語の前半と後半に描かれる親子の〈愛情〉描写と彼らに抱えられた問題に着眼し、物語の結末との関係を主に作品内部から考察することで、本作の〈家〉優先の志向を見出した。物語前半、親子は互いに〈愛情〉を抱きつつ、そこには齟齬や歪みも生じており、また〈家〉としては後継者不在の問題をも抱えている。この二つの問題のうち、〈家〉の問題は物語の最後に解決し大団円となるが、前者は親子そのものが引き離されており、主人公の女君や、男君の相手役の女春宮の身の上には、我が子の〈母〉として存在できないことの悲しみが語られる。以上のことから、物語の大団円に向けて、第一世代の〈愛情〉優先から第二世代の〈家〉優先へ、規範の転換が行われていることを考察するとともに、生き別れとなった〈母と子〉の描写に焦点が据えられていることに注視し、〈家〉を優先することで排除されるものへの問題意識がうかがわれることを指摘した。

第二章「〈不義の子〉の行方」では、密通により生まれた〈不義の子〉のモチーフの扱われ方について、『源氏物語』『狭衣物語』『浜松中納言物語』など先行作品と比較・考察し、本作の〈家〉意識を検討した。本作に描かれる〈不義の子〉は、①本当の出自が噂として広まる、②出自の露頭が大きな問題とならない、③物語の最後に家系上の父の子として入内し〈家〉の繁栄に携わるなど、『源氏物語』の光源氏と桐壺との子冷泉帝や、柏木と女三宮の間に生まれた薫のように親世代の密通のタブー性が重視されていた先行物語とは異なる。その根底には〈家〉の繁栄のためには血脈は問わないという姿勢があることを読み解くとともに、これに伴い、内面が焦点化され苦悩が描かれる〈不義の子〉も、実父が異なる人物から、実母不明の人物へと変化しており、そこに内在する問題も父子の関係から母子の関係へと変化が生じていることを明らかにした。

第三章「女君・宰相中将・宇治の若君」では、第一章・第二章で指摘した〈家〉優先の規範のなかで排除されるものへの本作の姿勢について、とくにその主題を担うと考えられる女君・宰相中将・宇治の若君ら母父子の関係を考察した。作中、宇治の若君を置き去りに失踪した女君に強調される〈心強さ〉の位相、および〈愛情〉の指標として「あはれ」「かなし」の語に注目することで、社会的に親子と認知されない母子（女君―宇治の若君）の精神的な結びつきと、そこからはじき出される父（宰相中将）の構図があることを確認した。基本的には父系を優先した〈家〉の繁栄を物語の支柱とするなかでも、〈母と子〉の関係性も重要な位置を占めているのである。なお、疎外される父宰相中将に対しても同

情的な語りであることから、これが父系対母系という単純な二項対立の問題ではないことにも言及した。

第四章「宰相中将の嘆きと物語の結末」では、物語のキー・パーソンとしてさまざまに重要な宰相中将に注目し、彼の父式部卿宮が実際に登場しないことの意義と、それにより宰相中将が本作で担う役割について、物語が彼の嘆きで終わることとの関連から論じた。式部卿宮の一人息子にして色好みという従来の主人公的な宰相中将の人物造型は、彼に物語を展開させる力を与える一方、皇統の貴公子を主人公とする物語に内在した王権回復の問題を含み持つ。また親の登場は物語に時間的な奥行きを作り出し、登場人物の背後に〈家〉の問題を立ち上げる。以上のことを物語内部の分析を中心に整理した上で、父式部卿宮の不登場はその問題を不可視化する手法であること、これにより彼は「をこ」な狂言回し役として、主人公・女君が属する摂関家の繁栄に寄与することを明らかにした。また、女君が中宮となったことを知らない宰相中将の彼女を思う嘆きで物語が結ばれることについて、摂関家の繁栄を目指す物語の枠組の視点から、中宮・国母となって〈家〉を繁栄に導くとともに一人の女としても愛され続けるという女君の幸福を担保するものであるという新たな読みを提示し、補説「〈愛情〉を媒介する子」では、宇治の若君が宰相中将の女君への献身的な〈愛情〉により誕生したと描かれていることに着目し、父母の〈愛情〉を結ぶ媒体としても機能していることを指摘した。

第五章「子を規定する〈母〉」では、『とりかへばや』の〈母〉について、従来注目されてきた存在の希薄性だけでなく、子の存在により北の方としての立場を保つ左大臣家の女君・男君の母たちの特異な人物造型を、作品内部の分析から考察した。子を規定するという点で女君と母との関係と母としての女君のありようは共通すること、第一世代の母は登場が少ないながらもそれぞれ我が子と関わり合いながら、我が子の〈母〉として存在できない女君のありように繋がっていることを明らかにした。

第Ⅱ部『我が身にたどる姫君』考一〈家〉の繁栄のなかの〈母と娘〉は、物語展開の軸として知られる皇統系の皇后宮系統（皇后宮—女三宮—後涼殿）と摂関家系の中宮系統（中宮—女四宮—藤壺）の二組の母娘三世代のうち後者に焦点を据え、摂関家の繁栄の視点から本作を捉え直したものである。具体的には彼女らに共通する「はなばな」とした特質に着眼し、その特質をめぐる〈母と子〉の関係や摂関家の繁栄との関わりを論じている。

第一章「王朝物語における「はなばな」とした女君の系譜」では、『我が身にたどる姫君』以前の物語において女性に用いられる「はなばな」という形容の分析を行い、「はなばな」とした女性がどのように描かれてきたのか、そこに内在する問題も含め考察・整理した。先行物語で女性を形容する「はなばな」は、美しさを対象とするものと振る舞いを対象とするものの二つに大別され、前者は肯定的に、後者は否定的に捉えられている。また、前者は他者から「はなばな」と見られることが、後者は自己の欲望を娘に押しつけ不幸に陥れる〈母〉としてのありようが重要な要素となってきたことが指摘できる。一人の女性が「はなばな」とした美しさ・振る舞いの双方を持ち合わせる例はすでに見られるが（『狭衣物語』洞院の上）、母娘間で継承が認められるのは「はなばな」とした美しさのみである（『夜の寝覚』寝覚の上—石山の姫君）。

以上を踏まえて第二章「中宮系統母娘の「はなばな」とした特質」では、『我が身にた

どる姫君』の「はなばな」の語の調査から、それが中宮系統（中宮一女四宮一藤壺）に意図的に付与されている蓋然性が高いことを確認した上で、肯定的にも否定的にも捉えられる「はなばな」とした姿の特性をずらしながら付与することで、彼女らをそれぞれ母の特徴を引き継ぐ同系統の女性に位置づけつつ、敵役的な中宮からサブ・ヒロイン的な藤壺へと転換が図られていることを明らかにした。この間、三人の「はなばな」とした姿は、後宮の他勢力を押さえつけるものであったり（中宮）、帝の寵を惹きつけるものであったり（女四宮・藤壺）というように、中宮系統の置かれた状況に応じ〈家〉の繁栄に関わるものとしてある。その重要性を踏まえたとき、これまで戯画的な描かれ方にばかり注目されてきた女四宮も、母中宮の「はなばな」とした姿を模倣しつつ魅力に変えて娘藤壺へと引き継ぐ重要な存在であることを指摘した。また〈母と娘〉の問題から彼女らのありようを捉えようと、先行物語においては娘を一方的に傷つける存在であった「はなばな」とした〈母〉が、その特質の継承により一方では娘に好影響を与える存在へと変化し、母娘関係も良好なものへと転じていることを論じた。

このように摂関家の繁栄に関わって中宮系統に付与されている「はなばな」とした特質だが、関白（中宮の兄）と皇后宮の密通により生まれた本作の主人公・我が身姫および彼女の娘である一品宮にも付与が認められることは看過できない。第三章「我が身姫 ―一品宮母娘の位置づけ」では、従来皇后宮系統に位置づけられてきた二人が、摂関家の子女として、中宮が理想とする摂関家が天皇家を支えていく社会体制が実現する上でも重要な立ち位置にあることを明らかにするとともに、母系である皇后宮系統に対する我が身姫の帰属意識が娘一品宮の自死という悲劇を招いていること、これにより皇后宮の血を引く后・国母の誕生の可能性が閉ざされ、中宮の孫である藤壺にその立場が一本化されていくことを読み解いた。

第Ⅲ部『木幡の時雨』考―〈母と姉妹〉の物語へは、従来「継子いじめ」ならぬ「実子いじめ」という話型の特異性が注目されてきた本作を、平安時代より王朝物語に内在してきた〈母と姉妹〉の物語として捉え直した論である。中世王朝物語後期の特徴として物語の短略化・話型化が明らかにされているが、そこに摂関家の繁栄という物語の枠組がどう吸収されていくのか、また〈母と子〉がどうなるのか、摂関家の繁栄をめぐる物語の変遷を見通すべく本作を取り上げた。

第一章「継子いじめ譚の話型と『木幡の時雨』」では、本作で〈母と姉妹〉の物語が継子いじめ譚の話型に沿って語られる理由について考察した。同時期の『住吉物語』型継子いじめ譚の流行や、他の中世王朝物語作品における〈母と姉妹〉の描写を分析し、母娘・姉妹間の不仲や葛藤の描写が避けられる傾向にあることを見出した上で、そうした風潮のなかで〈母と姉妹〉の問題を語るにあたり継母＝悪玉と規定する継子いじめ譚の枠組が有効に働くことを論じた。

第二章「継子いじめ譚からの斜行」では、継子いじめ譚の枠組のなかで〈母と姉妹〉の問題や葛藤がいかに描き出されているか、母の満足のうちに終わる本作の結末への着眼を起点に、実子を冷遇する母君の「四の君」という設定や、継子譚と本作との対立構造の違いを考察した。他作品における「四の君」「女四宮」の人物造型の調査から、それが妬婦の記号であることを突き止め、「実子いじめ」をする母君の造型を受け入れやすくしてい

ることを論じた。また、物語の冒頭表現や冷遇される娘の庇護者について、『住吉物語』との比較から、継子いじめ譚の持つ「二人妻」の対立構造が父方母方の対立に置き換わっていることを指摘した。最後に『住吉物語』にはみられない、母が長女にだけ本音を打ち明ける関係があることに言及し、如上の〈母と姉妹〉の物語への変化が、最後に母も満足して終わる、継子いじめ譚に典型的な報復譚を伴わない結末へと斜行させていることを論じた。

第三章「いびつな〈三角関係〉とその解消」では、物語冒頭における衣通姫の例示について、歌論・歌学書における衣通姫に関する記述の調査結果から、姉妹で允恭天皇の寵愛を受けつつ姉の嫉妬により不遇な人生を送ったとされる衣通姫の境遇を踏まえた「一人の男をめぐる姉妹の三角関係」の表象といえることを提示した上で、三の君に自己投影した母が中君と中納言を争うという当初のいびつな〈三角関係〉から、三の君の成長による母との分離を経て三角関係が正常化し、その後、姉妹の類似・同化によって三角関係は解消、交換可能性が浮上するという物語の論理を読み解いた。

以上、『とりかへばや』『我が身にたどる姫君』『木幡の時雨』について、〈母と子〉の視座から検討した。これらの考察から導き出されるのは、〈母と子〉のありようが、さまざまな形で〈家〉の存続や繁栄の問題に関与する物語の様相である。上記三作品において〈母〉は、後継者となる子を産む存在としてだけでなく、子を規定する、特徴を継承する、自己投影する、支配する、教育するなど、〈子〉との関係性によって〈家〉の繁栄や崩壊に関与するが、一方で、子の母方への帰属意識が〈家〉の安泰を左右する場合もある。右のような〈母と子〉の基底にある問題は、平安時代の王朝物語に登場する〈母と子〉に内包されてきた問題と通底し、双方が地続きにあることが明らかとなった。

また、成立順に随い三作品を俯瞰することにより、各々の作品が成立した時代との関連性、作品同士の緩やかな連続性も認められた。『とりかへばや』（12世紀後期）の〈母と子〉は、女君と宰相中將の子である宇治の若君との関係、すなわち、〈家〉の存続・繁栄の過程で排除されるものの上にクローズアップされる。このような点には、12世紀後半という中世的〈家〉が成立しつつある過渡期にあって、〈家〉の問題が意識されつつ、まだそこに全てが集約されきっているわけではない人々の心のありようが看取され、女君・宰相中將・宇治の若君の三人のみに焦点を絞ると、子が父に帰属する社会構造のなかでの、子の母系への帰属意識の問題も垣間見える。このことは宰相中將から〈家〉の問題が意識的に落とされている本作では大きな問題とはならないが、その片鱗はすでに認められる。

これに対し『我が身にたどる姫君』（13世紀中後期）の中宮系統に描かれる〈母と子〉は、〈家〉の繁栄に積極的に携わるものである。物語が描く複雑な系図には、同時代に『尊卑分脈』が編纂されていることとも共通する家系・系図への意識も指摘されている。こうした意識の高まりのなかでは母娘間の継承の問題がそれまで以上に大きな意味を持つようになり、個々の造型の持つ意味合いも変容していく。一方、中宮の兄関白の娘でありながら、その中宮と対立する皇統系の皇后宮の娘でもある我が身姫——一品宮の〈母と子〉には、父系に帰属している子の、母系への帰属意識の問題が見据えられる。これは皇后宮系統再興の可能性の断絶だけでなく、中宮系統の帝の死をも招くものとして、重く描かれている。『とりかへばや』では宇治の若君の上にゆるやかにあったこの問題が、強烈に頭をもたげ

てくるのも、〈家〉意識の強化と相関関係にあると捉えられよう。

さらに『木幡の時雨』（14世紀前期）では、継子いじめ譚の話型のなかに摂関家の物語の繁栄の構造を含みつつも、その繁栄とは距離のあるところで〈母と子〉が描かれていた。この二つのうち比重が置かれているのは〈母と子〉の方で、〈家〉の繁栄の結末は室町物語に典型的な末繁盛型にも近く、王朝物語における〈家〉の問題の位置づけのさらなる変化がうかがわれる。

〈母と子〉の問題の個々の様相に関していえば、『木幡の時雨』の「実子いじめ」の内実——父に鍾愛される娘が母から冷遇されるという状況は、『源氏物語』の玉鬘とその娘たちや『とりかへばや』の右大臣家の四の君と母との関係にも認められる。『とりかへばや』では、その結果として女君と宇治の若君の引き裂かれた〈母と子〉のありようが作り出されることに重きが置かれているが、『木幡の時雨』では、母娘関係の問題それ自体がもう一度掘り下げられている。また、きょうだい交換のモチーフも、『とりかへばや』に比べ、母と娘の支配—被支配の問題、姉妹の類似の問題など〈母と子〉の問題により密接したものとなっている。『我が身にたどる姫君』との関連では、三の君の婿となった中納言に母君が「はなばな」とかしづく描写があり、後に三の君が母のせいで憂き目をみたと回顧しているなど、『我が身にたどる姫君』で回避された「はなばな」とした〈母〉の問題が再び浮上してくる。

このように、中世王朝物語の〈母と子〉を通じて描かれるものの変化は、作品に内包される〈家〉の問題との距離を反映していると考えられるのである。

論文審査結果の要旨

論文の概要

本論文は、中世王朝物語『とりかへばや』（十二世紀後期）・『我が身にたどる姫君』（十三世紀中後期）・『木幡の時雨』（十四世紀前期）の三作品を対象に、そこに描出される〈母と子〉の諸相に着目しながら、各作品の読み直しを試みたものである。

中世王朝物語研究において、〈家〉の問題を避けて通ることはできない。神田龍身が中世王朝物語の多くが父子関係によって構造化されていることを指摘し、父系継承を原則とする中世的な〈家〉意識の到来を論じて以来、父系論理を前提に物語世界内の「家」同士の間・葛藤の問題を読み解く試みが盛んに行われている。その一方で、〈母〉あるいは母系は父系継承を支えるものであることが自明とされ、〈母と子〉が〈家〉との関わりにおいて積極的に論じられることはなかった。

これに対して論者は、『うつほ物語』『源氏物語』など先行の王朝物語に〈母と子〉をめぐるさまざまな問題が内包され、時としてそれが物語世界を動かす原動力ともなり得たことに着目し、〈母と子〉の視座から中世王朝物語の捉え直しを試みる。王朝物語からの変容を手がかりに、父系論理に基づく中世王朝物語において〈母と子〉がいかに描かれ、〈家〉の問題にどのように関わってくるかを、十二世紀から十四世紀にかけて成立した上記三作品の分析を通じて解明することを目指したものが本論文である。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第Ⅰ部 『とりかへばや』考―〈家〉の萌芽と〈母と息子〉

第一章 〈家〉の繁栄と親子の離別

第二章 〈不義の子〉の行方

第三章 女君・宰相中将・宇治の若君

第四章 宰相中将の嘆きと物語の結末

補説 〈愛情〉を媒介する子

第五章 子を規定する〈母〉

第Ⅱ部 『我が身にたどる姫君』考―〈家〉の繁栄のなかの〈母と娘〉

第一章 王朝物語における「はなばな」とした女君の系譜

第二章 中宮系統母娘の「はなばな」とした特質

第三章 我が身姫―一品宮母娘の位置づけ

第Ⅲ部 『木幡の時雨』考―〈母と姉妹〉の物語へ

第一章 継子いじめ譚の話型と『木幡の時雨』

第二章 継子いじめ譚からの斜行

第三章 いびつな〈三角関係〉とその解消

終章

続いて、各章の概要を述べる。

「序章」では、王朝物語から中世王朝物語への流れを概観し、先行研究に触れながら論文全体の目的を示し、論文全体の全体の構成について言及する。

「第Ⅰ部 『とりかへばや』考―〈家〉の萌芽と〈母と息子〉」は、左大臣家の繁栄を語る物語としての『とりかへばや』で描かれる母子の様相を、父子間・男女間の問題を交えて論じたものである。「第一章 〈家〉の繁栄と親子の離別」は、第一世代、第二世代の親子の〈愛情〉描写に着目し、〈家〉の問題を抱えた第一世代の親子間には〈愛情〉の歪みや齟齬がみられること、第二世代の〈母〉に関しては我が子に〈母〉と名乗れない悲しみが語られることを指摘する。第一世代から第二世代に向けて〈愛情〉から〈家〉へと規範の転換がなされながらも、〈家〉を優先することで取りこぼされるものへの問題意識が窺われることを論じた。

「第二章 〈不義の子〉の行方」では、『源氏物語』などの先行物語と〈不義の子〉の描かれ方を比較し、『とりかへばや』の家意識を明らかにした。『源氏物語』では〈不義の子〉の出自は秘匿されているのに対し、『とりかへばや』においては世間に広く知れ渡っていることに着目し、本作に〈家〉の繁栄のためには子の血脈は問わないという姿勢が特徴的であること、また、〈家〉の繁栄の裏で断ち切られる母子関係が問題として見据えられていることを示した。

「第三章 女君・宰相中将・宇治の若君」は、第一章・第二章で指摘した〈家〉優先の規範のなかで取りこぼされるものへの本作の姿勢について、女君（母）・宰相中将（父）・

宇治の若君（子）の関係から考察した。繰り返し強調される女君の〈心強さ〉と、「あはれ」「かなし」の語に注目し、「母子の精神的な繋がり」とそこからはじき出される父」の構図は〈家〉の繁栄をもって大団円とする本作の大枠の論理に対するアンチテーゼであることを指摘すると共に、疎外される宰相中将に対しても同情的な語りであることから、これが「父系対母系」という単純な二項対立の問題ではないことについても言及した。

「第四章 宰相中将の嘆きと物語の結末」は物語のキーパーソンである宰相中将の父式部卿宮が作中に登場しないことの意味と、宰相中将が本作で担う役割について、物語が彼の嘆きで終わることとの関係から考察している。〈親〉は〈家〉の問題と不可分であり、父式部卿宮が登場しない宰相中将は、〈家〉の問題からは切り離された存在として女君が属する摂関家の繁栄に寄与していることを示した。また、失踪した女君を思う彼の嘆きで本作が結ばれることは、女君が〈家〉に繁栄をもたらす中宮・国母としての社会的立場と自分自身に注がれる〈愛情〉を共に手に入れたことを意味するという新しい読みを提示した。補説「〈愛情〉を媒介する子」では、宇治の若君が宰相中将の女君に対する献身的な〈愛情〉により誕生したと語られていることを重視し、彼が父母の〈愛情〉の象徴・媒介としても機能していることを明らかにした。

「第五章 子を規定する〈母〉」は、優れた子の存在によってのみ北の方としての立場を保つことが明示される左大臣家の女君・男君の母たちの特異な人物造型を中心に、本作における〈母〉の問題は「母のありようが子を規定する」という点で通底しており、父系を軸とした展開の反立としての側面をも有すると論じた。

「第Ⅱ部 『我が身にたどる姫君』考—〈家〉の繁栄のなかの〈母と娘〉」は、『我が身にたどる姫君』における皇統の皇后宮系統（皇后宮—女三宮—後涼殿）と摂関家の中宮系統（中宮—女四宮—藤壺）二組の母娘三世代のうち後者に焦点を据え、摂関家の繁栄の視点から本作を捉え直したものである。「第一章 王朝物語における「はなばな」とした女君の系譜」は、本作以前の物語で女君に用いられる「はなばな」という形容の分析を行い、先行物語において「はなばな」は女君の①美しさ②振る舞いの二つの要素に対して用いられ、①は肯定的、②は否定的に捉えられていること、①は他者から「はなばな」と見られること、②は自己の欲望を娘に押しつけ不幸に陥れる〈母〉としてのありようが重要な要素であることを示した。

「第二章 中宮系統母娘の「はなばな」とした特質」は、本作において「はなばな」の語が中宮系統に意図的に付与されている蓋然性が高いことを確認した上で、「はなばな」とした女君の姿が肯定的にも否定的にも捉えられることを利用し、中宮—女四宮—藤壺はそれぞれ「はなばな」とした母の特質を引き継ぎながら、その連鎖とずらしにより敵役的な役割からサブ・ヒロイン的存在へと立ち位置を転換させ、最終的に皇統系と摂関家系が融和していくことを指摘した。

「第三章 我が身姫—一品宮母娘の位置づけ」では、中宮系統の女君に付与される「はなばな」とした特質が中宮の兄関白と皇后宮の密通により生まれた我が身姫と彼女の娘—一品宮にも付与されていることを起点に、女四宮と対に描写される我が身姫の「はなばな」とした美貌は摂関家の子女としての彼女の立ち位置の象徴で、摂関家の繁栄システムの内側に皇后宮系統の血筋が抱え込まれていることを読み解く。また、我が身姫の母系への帰属意識が娘—一品宮の自死を招いたことで皇后宮の血を引く后・国母誕生の可能性が閉ざさ

れ、その立場が摂関家の藤壺に集約されていく道筋を明らかにした。

「第Ⅲ部 『木幡の時雨』考―〈母と姉妹〉の物語へ」は、従来「実子いじめ」の話型の特異性ばかりに注目されてきた『木幡の時雨』を、王朝物語における〈母と姉妹〉の物語の系譜上に捉え直し、摂関家の繁栄をめぐる物語の変遷と関連づけて論じている。「第一章 継子いじめ譚の話型と『木幡の時雨』」は、継子いじめ譚の話型を用いて〈母と姉妹〉の物語が語られることの意味を考察したもの。『住吉物語』型継子いじめ譚の流行や、他の中世王朝物語作品における〈母と姉妹〉の描写の分析を踏まえ、〈母と姉妹〉の問題を語るにあたって継母が悪役と規定される継子いじめ譚の枠組が有効に機能していることを示した。

「第二章 継子いじめ譚からの斜行」は、母君の喜びの裡に物語が幕を下ろす本作の結末に着目し、継子いじめ譚の枠組のなかで〈母と姉妹〉の問題や葛藤がいかに描き出されているかを読み解いた。先行物語における「四の君」「女四宮」の調査から「四の君」が妬婦性の記号であることを明らかにし、母君が「前の四条大納言の御女四の君」であることで、継子いじめから「乳母への嫉妬から実子を冷遇する」実子いじめへの斜行が可能になったとする。これを踏まえ、娘を支配・所有する母とそれに対する娘の反発・反抗を描きながらも、根底で〈母と娘〉の繋がりが重視された物語としての本作の新たな読みを提示した。

「第三章 いびつな〈三角関係〉とその解消」は、物語冒頭で母君に冷遇され涙を浮かべる中の君が衣通姫に擬えられることの意味を検討したものである。歌論・歌学書における衣通姫の記述を調査し、この比喻が一人の男と姉妹の〈三角関係〉の表象であり、当初は三の君に自己投影した母が中の君と中納言を争う構図のいびつな〈三角関係〉であったものが、三の君の成長・母との分離によって正常化し、姉妹の類似・同化・交換により最終的にこの〈三角関係〉が解消に至り大団円を迎えること、本作が王朝物語で繰り返し語られた母娘の支配・被支配という問題に根ざしつつ、その打開を目指した物語であることを導き出した。

如上の論述を踏まえ、「終章」では、〈母と子〉のありようがさまざまな形で〈家〉の存続や繁栄の問題に関与する中世王朝物語の様相について総括する。本論文で取り上げた三作品において、〈母〉は、後継者となる子を産む存在としてだけでなく、子を規定する、自らの特徴を継承させる、自己投影する、支配する、教育するなど、〈子〉との関係性によって〈家〉の繁栄や崩壊に関与する一方、子の母系への帰属意識が〈家〉の存続を左右する場合もあることを示し、このような〈母と子〉のありようの基底には平安時代の王朝物語に登場する〈母と子〉に内包されてきた問題が多く認められ、この点において両者が地続きにあることを確認した。また、これらを通時的に俯瞰することで、〈家〉の存続・繁栄のなかで取りこぼされるものをクローズアップする『とりかへばや』、〈母と子〉が〈家〉の繁栄に積極的に携わる『我が身にたどる姫君』、摂関家の繁栄よりも〈母と子〉の問題に比重が置かれる『木幡の時雨』と、それぞれに描かれる〈母と子〉のありようと各々の成立時代における〈家〉意識が密接に結びついていることを指摘し、他の中世王朝物語も同様に作品に内包される〈家〉の問題との距離を反映しているであろうとの見通しを示した。

審査結果

『源氏物語』や『狭衣物語』などの王朝物語を模倣し制作された中世王朝物語は、しばしば王朝貴族社会とその文化に対する賛美と憧憬の産物であるともいわれ、その作中世界は基本的には中世の社会や制度とは無関係のものとして設定されている。一方で、中世的な社会構造の変容という現実が虚構の作品世界に少なからぬ影響を及ぼしていることも確かであり、中でも「中世的「家」」の問題は中世王朝物語を考える上で避けて通ることのできないものである。

領地や家存続に関わる文書、人間関係を継承するために必要とされた「氏」「族」とは別の基礎的ブロックが「中世的「家」」であり、「家」の継承をめぐる撰関家が他貴族よりも早く嫡子問題に取り組んだとの高橋秀樹の指摘（「中世的「家」の成立と嫡子」『史学雑誌』100巻9号,1991）は「家」についての大きな成果であった。これとほぼ同時期に神田龍身が中世王朝物語の多くが父子関係によって構造化されていることを指摘し、父系継承を原則とする「中世的な〈家〉意識の到来」を論じて以来（『物語文学、その解体』有精堂、1992）、父系論理を前提に物語世界内の「家」同士の対立・葛藤の問題を政治的に読み解く試みが盛んに行われてきた。一方で、女君の入内をめぐる複数の権力者が鎬を削る姿、あるいは帝の寵を競う後宮の女性たちの姿がくり返し描かれるにもかかわらず、女性は主題を担い得ない補助的存在と見做され、等閑視されてきたことも事実である。申請者がこのような中世王朝物語研究のあり方に疑問を抱き、〈母と子〉という視座からの丹念な読み直しを通じて、そこに内在する〈家〉の問題を可視化させたことの意義は大きい。

本申請論文は、王朝物語が内包する〈母と子〉の問題が中世王朝物語においてどのような変容を遂げているかに着目し、成立時代が異なる『とりかへばや』『我が身にたどる姫君』『木幡の時雨』の三作品において、〈母と子〉がいかにか描出され、いかなる役割を担わされているかという問題意識の下、従来の父系論理優先の読みからは取り零されてきた問題を掘り上げたものである。中世王朝物語においては、〈家〉の繁栄と親子の〈愛情〉とが拮抗する関係にあり、混乱を越えて〈家〉の繁栄を獲得していく過程を描くことが物語の主題として重要であって、その上で母子間の〈愛情〉が描かれもするという新たな読みが明確に提示されている。

全体的に論述は精確・適切であり、説明も巧みで、一読して理解できるものである。先行研究の紹介の仕方、踏まえ方も適切と思われ、かつ、論述の過程にある『源氏物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』の把握の仕方も適切と思われる。

各論に関していえば、第Ⅰ部『とりかへばや』考では、異性装に対する興味が優先されがちであった本作に、〈家〉の繁栄の裏にある個人の愛情の抑制・犠牲が見据えられ、〈家〉を優先することで排除されるものへの問題意識が窺われるという指摘や、父式部卿宮が登場しないことで宰相中将が〈家〉を背負わない存在とされていることの意味を明らかにした点が特に重要である。

第Ⅱ部『我が身にたどる姫君』考では、「はなばな」を鍵語として『源氏物語』以下の物語文学における女性人物の人物造型を辿り、『夜の寝覚』の石山の姫君を美質と母娘継承との両面をもつことになる転換点と見定めたことも有益な指摘であり、具体的な語に対する分析を踏まえて皇后宮系統と撰関家系統の人物系譜の問題を考察していく論述は説得

力のあるものといえる。

第Ⅲ部『木幡の時雨』考は、表層的な継子いじめ譚から実子いじめ譚への転換の深層に『源氏物語』竹河巻を淵源とする母と姉妹の物語を見出した点が重要である。当初は中の君と三の君が中納言を争うのではなく、三の君に自己投影した母が中の君と中納言を争う構図のいびつな〈三角関係〉であったものが、三の君が成長し母と分離していく過程で正常化していく様相を丁寧に解き明かし、本作の新しい読みを提示したことも高く評価される。

ただし、以下のような問題点も指摘された。

摂関家の繁栄の物語としての枠組を持つこと、女性作者と目されていることという二つの条件を満たす作品を考察の対象としたと序論で述べているが、〈母と子〉の問題が作者のジェンダーとどのように関わっているのか、作品に内在する〈家〉の問題に如何なる位相差が生ずるのかについての見解が具体的に示されていない。また、皇統に対する摂関家の優位という点が十分に説明しきれていない。

歴史研究と文学研究とで齟齬が生じがちな〈家〉の問題を取り上げ、一定の成果を上げたことは確かであるが、「ウヂ」から「イエ」への家の概念と十分議論をかみ合わせる状態にできたかどうかについては、やや疑念が残る。「血脈」「家脈」「血筋」といった用語についても定義ないし説明が必要である。また、王朝物語との差異に着目している以上は平安朝からの流れをもう少し明確に言語化すべきであり、王朝物語の登場人物の例示に関しても、どの場面を念頭においたものであるのかを具体的に示すことが求められる。

各作品が制作された時代背景や、作者と推測される周辺の問題について、先行研究によりながら触れられている箇所も見受けられるが、その検討は未だ不十分である。多くの研究蓄積がなされている女性史研究を今少し活用することで、三作品の時代的な変遷、登場人物の造形や特徴、作品内容の意味、製作意図等をより深く読み取ることができるのではないか。

このような問題点はあるにせよ、上記の指摘は次なる目標として今後の追求が期待されるものであり、本論文が中世王朝物語研究において一石を投じたものであることは動かない。本論文が提示した〈母と子〉という視座は、歴史学研究への逆照射ともなり得る重要な成果でもある。申請者自身がこの点を自覚し、より広い視野から研究を進め、中世王朝物語史を再構築することが強く望まれる。

以上の審査内容を総合的に判断し、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達していると評価し、博士（文学）の学位を授与するに相応しいとの結論を得たことを報告する次第である。